

## 民俗学界に

### 巨大な足跡

宮本常一は、川間村を調査した前後あたりから、民俗学に対し、ひとつの疑問を持っていました——日常生活の中から民俗的な事象をひき出して、それを整理してならべることで民俗誌は事足りるのだろうか、と。

こうした宮本の発想には、渋沢敬三が提唱し、昭和11(1936)年から実施された日本人類学会と日本民族学界の連合大会、その後の六学会連合、さらに昭和25(1950)年、宮本も参加し、民族学、人類学、社会学、地理学など8つの学会が連携し、対馬を総合調査した「八学会連合」の成功があったようです。

川間村の調査報告書も、宮

本自身がすべて書くのではなく、それぞれ専門家が調査・分担して執筆する方法で作成されました。

宮本は、昭和40(1965)年に武蔵野美術大学の専任教授となり、民俗学、生活史、文化人類学の講義を始めたり、学外の学生や教員も多数集め、生活文化研究会というサークルも創設しました。

翌年には日本観光文化研究所の開設とともに、旅のあり方や地方の文化の研究も精力的に進めました。

また、離島振興法の成立や、田耕の鬼太鼓座(後の鼓童)設立、周防の猿まわしの復活、郷里の東和町の「郷土大学」設立などにも積極的に関わりました。



宮本常一／本センター文化交流センター

さらに佐渡では、廃校となった小学校を利用し、地域の人々の力を結集しての民俗博物館の設立や、八珍柿

の殖産奨励なども指導しています。

柳田國男が基礎を築いた「民俗学」という分野を、より幅広い学問とするともに、独自の研究方法を確立するなど、民俗学界に巨大な足跡を残した宮本ですが、昭和56(1981)年1月30日、73歳で亡くなりました。

宮本は、どんな時も人の生きる姿を通して、未来への希望や生きる糧を見い出していました。

そして宮本は、『生きることは？』の問いに、こう答えています。

「どのようになさやかな人生でも、それぞれがみずからいのちを精一ぱいに生きるものはやはりすばらしいことである。生きるということは何かいりるの意味があるだろうが、一人一人にとってはその可能性の限界をためしてみようかな生き方をすることではないかと思う」と。

※文中敬称略(宮本常一の章・終わり)

【参考資料】「旅する巨人」佐野眞一(文藝春秋)「民俗学の旅」(講談社)／「別冊太陽・宮本常一」(平凡社)

## 10月の休日当番医

休日当番医での診療時間

外科・産婦人科 = 9時～22時 (ただし16時～19時は除く)

内科 = 9時～16時 (19時～22時は急病センターで行います)

日(曜日)	外科	内科	産婦人科
5日(日)	山崎外科内科(☎7122-2359)	豊泉医院(☎7129-3813)	川間太田産婦人科医院(☎7127-1135)
12日(日)	西村クリニック(☎7123-0050)	石井医院(☎7122-2434)	小張総合病院(☎7124-6666)
13日(月)	しばやま整形外科(☎7120-5355)	鈴木医院(☎7124-5683)	遠藤産婦人科医院(☎7124-7860)
19日(日)	小張総合病院(☎7124-6666)	野田病院(☎7127-3200)	杉崎クリニック(☎7125-1070)
26日(日)	野田中央病院(☎7122-6161)	花井クリニック(☎7123-3900)	川間太田産婦人科医院(☎7127-1135)

※休日当番医は変更することもあります。受診の際にはテレホンガイド(☎7124-7272:コード6101)、または野田市ホームページ(<http://www.city.noda.chiba.jp/kurashi/04-01-01.html>)で確認してください。

## 急病センター

☎7125-1188

▼内科(小児科) = 19時～22時(毎日)

▼歯科診療 = 9時～12時(休日)

▼朝晩めっきり涼しさを増し、さまざまな場面で秋の気配が感じられる季節となってきました。スポーツの秋、食欲の秋、芸術の秋など多様に形容される季節とあって、市内では地区運動会や文化祭などの多彩な催しが開催され、あちこちで交流の輪がひろがります▼今年度から40歳以上を対象にメタボに着目した特定健康診査・特定保健指導が始まりました▼私事でありますが、黄色信号のお腹周りをなんとかしようとして、「食欲の秋」は我慢し、「スポーツの秋」を満喫しようと思えます (の)

### 編集後記

市の木



けやき

市の花



つつじ

市の鳥



ひばり